

心理検査

心理検査を行うにあたって

心理検査はあくまでも補助的な手段であり、それだけで心理アセスメントが完成するわけではありません。心理検査を行う際には、被検者(家族)にその検査の目的や、その心理検査にかかる時間や予想される負担を説明し、同意を得ることが必要です。

心理検査においては、データのみではなく、被検者の表情、態度、応答するスピード、粘り方などからもたくさんの情報が得られます。よく観察するようにしましょう。

また、検査場面の雰囲気、検査者との関係性も影響を与える可能性がありますので、被検者とのラポール形成に配慮しましょう。

キーワード

- 信頼性
- 妥当性
- 発達検査
- 知能検査
- パーソナリティ検査
- 質問紙法
- 投影法
- 作業検査法
- テストバッテリー

信頼できる心理検査とは

臨床場面で使用される心理検査は、信頼性と妥当性を検討する標準化の手続きがとられています。信頼性とは、検査による測定が一貫性をもつかの度合いであり、妥当性とは検査で測定したい内容が適切に測定されているかの度合いです。

主な心理検査

ここから、臨床場面でよく使われている心理検査をご紹介しますが、心理検査は多種多様であり、すべてを紹介できるわけではありません。必要な心理検査を吟味し、施行する際にはその対象と手続き、結果の算出方法や解釈の仕方などしっかりと勉強してから行うようにしましょう。

① 発達検査

発達検査とは、主に乳幼児を対象とし、身体面、社会面、認知面など全体的な発達状況を把握するために用いられるものです。

- 円城寺式乳幼児分析的発達検査法

「運動」「社会性」「言語」の3つの領域の発達について評価すること

ができます。

(対象年齢：0か月～4歳8か月)

- 改定日本版デンバー式発達スクリーニング検査

「個人-社会」「微細運動-適応」「言語」「粗大運動」の4つの領域の発達について評価することができます。

(対象年齢：生後16日～6歳)

② 知能検査

知能検査は、知能を測定する目的で行われる検査です。

ビネー式：フランスのビネーが1905年に開発した知能検査を基にしたもので日本では主に2種類の検査があります。検査で解答できた問題の難易度がどの年齢レベルにあるかを意味する精神年齢(MA)と生まれてからの暦の上での生活年生(CA)の比例知能指数(比例IQ)を算出します。

- 田中ビネー知能検査V

(対象年齢：2歳0か月～成人)

- 改定版鈴木ビネー知能検査

(対象年齢：2歳0か月～18歳11か月)

ウェクスラー式：アメリカのウェクスラーが1939年に診断的情報を得ることができる知能検査として開発しました。幾つもの下位検査から構成され、言語性IQと動作性IQの算出が可能です。下位項目のディスクレパンシー分析などより被検者の知的能力のバランスをみることができます。最近では、発達障害のアセスメントにおいても頻繁に利用されています。

- WAIS III (対象年齢：16歳～89歳)

- WISC IV (対象年齢：5歳0か月～16歳11か月)

- WIPPSI III (対象年齢：2歳6か月～7歳7か月)

その他の知能検査として、コース立方体組み合わせテスト、グッドイナフ人物画知能検査などがあります。

③ 認知症検査

- 長谷川式認知症スケール

長谷川和夫により作成された老年期の認知症評価スケールです。見当識や記憶力など9つの設問項目について30点満点で得点化し、20点以下の場合、認知症の可能性が高いとされます。

その他、認知症検査には、MMSE (Mini Mental State Examination)、日本版リバーミード行動記憶検査 (RBMT)、N式精神機能検査などがあります。

④ パーソナリティ検査

パーソナリティ検査には、大きく分けて「質問紙法」「投影法」「作業検査法」があります。

質問紙法は、質問に対して与えられた選択肢から当てはまるものを選ぶタイプの検査です。主に、被検者が意識できている特徴を反映されるとされ、検査によっては虚偽の反応を防ぐための工夫がされているものもあります。

投影法は、曖昧な刺激を被検者に提示し、被検者がどのようにその刺激を捉え意味を与えるかによって、その人の内的な特徴を明らかにしようとする検査です。

作業検査法とは、一定の作業を一定の条件でしてもらい、その実施態度や結果からその人の特徴を捉える検査です。

(1) 質問紙法

- MMPI 新日本版：ミネソタ大学ハサウェイとマッキンリーによって作成された検査です。米国を中心に使用頻度の高いパーソナリティ検査です。質問項目は550問とやや多く、精神医学を背景とした10個の臨床尺度と4個の妥当性尺度から構成されおり、医療領域での使用頻度が高いものです。
- 矢田部ギルフォード性格検査（YG 性格検査法）：アメリカのギルフォードによる人格目録を基に、日本で矢田部らが開発しました。12の性格特性についての質問120項目に対して「はい」「いいえ」「どちらでもない」を選択し、その結果から15種類の性格類型に分類するものです。医療領域のみならず、産業領域、教育領域など幅広く利用されています。
- エゴグラム：アメリカの精神科医バーンが提唱した交流分析理論に基づき、デュセイが作成したもので、自我状態を5つに分類し、そのバランスをみる検査です。日本では東大式エゴグラム（TEG）が開発され、幅広く利用されています。

(2) 投影法

- ロールシャッハテスト：スイスの精神科医であるヘルマン・ロールシャッハが作成した、有名な投影法の心理検査です。10枚のインクのシミが書かれた図版を被検者に見せ、その反応をスコア化し、被検者の無意識も含めた、思考、感情、行動などの傾向を解釈する検査です。手続きやスコアリングの方法としてクロッパー法、片口法、エクスナー法など幾つかの方法があります。施行手続き、反応のスコア化、解釈はかなり複雑で専門性が高いため、きちんとした研修と経験を重ねる必要があります。精神科領域で使用頻度が高い検査です。

- 絵画統覚検査（TAT）：マレーが開発した投影法検査です。ある場面を描いた絵を見て、被検者に物語を作ってもらい、その内容から被検者の願望、衝動、意図などパーソナリティの特徴を明らかにしようとするものです。図版は29枚の絵と1枚の白紙がありますが、実際は被検者の状態に合わせて数枚を施行することが多いようです。
- PF スタディ：ローゼンツァイクによって考案された24の刺激画からなる検査です。どの刺激画にも描かれた人物にとっての欲求不満場面が描かれています。その人物の台詞を被検者が考えて記述するというものです。アグレッションの方向とアグレッションの型という2つの軸に基づいて判定を行います。
- バウムテスト：コッホが考案した描画を用いた心理検査です。被検者に「木」の絵を描いてもらい、大きさや、幹、枝の様子など描かれた木の特徴から被検者の性格特性をつかむものです。
- 文章完成テスト（SCT）：「私が子供のころ…」といった未完成の短文の続きを被検者自身に書いてもらいます。記述から、知的側面、情意的側面、指向的側面、力動的側面について検討でき、文章の内容からは被検者の考えや思いを理解することができます。

(3) 作業検査法

- 内田クレペリン精神検査：ドイツの精神医学者クレペリンの研究を基に、内田勇三郎が心理検査として確立したものです。一桁の足し算を1分ごとに繰り返し行い、その作業曲線のパターンから性格特徴や適性を判定します。

テストバッテリーについて

心理検査にはそれぞれに特徴があり、一つの心理検査で被検者の全体像を明らかにできるわけではありません。そこで幾つかの心理検査を組み合わせて施行することが多く、その組み合わせのことをテストバッテリーといいます。テストバッテリーの組み方は、特に決まった方法があるわけではありませんが、知能検査、質問紙法、投影法を組み合わせることが一般的です。たくさんの心理検査を行うことは、被検者の負担にもなりますので、被検者の調子や状態を考慮しながらテストバッテリーを組むようにしましょう。

検査結果の説明について

心理検査の結果説明においては、専門用語を羅列するのではなく、被検者が理解できるよう、日常用語を用いて説明しましょう。

単に結果の数値を伝えるのではなく、テスト結果が実際の生活ではどのように現れ、どのように被検者の辛さにつながるのか考えることが大切です。

被検者の苦手な部分、弱点、短所を指摘するだけでなく、被検者の資質、強みとなる点、長所も伝え、被検者をエンパワメントするように配慮しましょう。

いずれにしても、心理テストを施行しその結果を伝えることが、被検者のメリットになるように配慮と工夫が必要です。

まとめ

心理検査を行う際には、被検者の同意を取り、その結果を被検者のメリットとなるよう利用することが大切です。心理検査には知能検査、パーソナリティ検査など多種多様な検査があり、必要に応じてテストバッテリーを組むことが必要です。